# 近世大名相良氏の成立と安定

## 四六　長毎肖像画

江戸時代前期

相良神社所蔵

相良長毎は兄忠房の急死により二十代となった人物である。島津軍の豊後攻めに加わり、豊臣秀吉の九州平定により秀吉に下り、朝鮮出兵、関が原戦い、大阪夏の陣と全国規模の争乱の中に生きた武将で、人吉城の改修や城下町の整備など近世人吉藩の基礎を築いた。

肖像は直衣束帯の朝服で冠を戴き、右手に笏を持ち、太刀を佩く。後世に定型化する様式の姿である。

## 四七　豊臣秀吉領地朱印状（影写本）

天正十五年五月晦日

人吉市教育委員会所蔵

秀吉は天正十五年五月はじめに島津氏を下し、その帰途の八代において相良長毎と会い、長毎を宮内少輔に任じ、旧領の球磨郡を安堵した。安堵状には肥後領主となった佐々成政を支援し、奉公に励むように記す。

## 四八　文禄・慶長役の経路図

（佐賀県立名護屋城博物館展示図録より引用）

相良長毎は文禄元年二月二十六日に八百人の兵とともに球磨を発ち、朝鮮出兵に従軍した。朝鮮では加藤清正の組となり蔚山城を守備し、翌二年六月晋州城攻め、漢城占領、安辺城の守備、摂界城、西生浦城の守備をしている。

慶長の役では、慶長元年十二月に渡海し、黒田・毛利組として従軍する。翌年七月の熊川海戦、八月の赤国南門城・倶知也城・巴曼城の攻撃、十月に楚顛城の普請手伝い、慶長三年正月には泗川城から蔚山城への救援、釜山城守備、巨泉城守備、再び釜山城を守備して終戦を迎え、帰国している。

出陣は七年におよび相良軍で戦死・病死の人数は二百六十人余であった。

## 四九　相良頼房書状

（文禄二年）八月五日

願成寺所蔵

この書状は文禄二年六月の晋州城（もくそ城）攻めにおいて長毎の身辺で奉公した従軍僧の教王院（願成寺十三世院主勢辰）の働きに対して陣中で出された感状である。

## 五〇　相良頼房立願文

文禄五年十一月吉日

願成寺所蔵

文禄五年十月二十七日に改元があり慶長となる。同年十二月に長毎は再び朝鮮に出兵する。この文書はその出陣にあたり武運長久と家門安全を青井神社に祈願し、水田二町を寄進するという内容である。

## 五一　永国寺千人塚石塔（写真パネル）

朝鮮出兵で秀吉は諸大名に手柄の証拠として討ち取った敵兵の耳鼻をそぎおとし塩漬けにし、目録を提出するように命令する。頼房も耳鼻千八百を秀吉に進上した。永国寺鐘楼門の左前に立つ石塔は、その霊を鎮めるためのものと伝わる。元は門前の千人塚に建てられていたものである。

## 五二　勢辰図

江戸時代初期

願成寺所蔵

勢辰は天文十六年に生まれ、根来寺や金剛峰寺で修行し、多くの仏典を願成寺にもたらし、天正十六年に十三世院主となる。願成寺中興の祖と呼べる傑僧で、教王院とも称し朝鮮出兵にも従軍している。慶長十六年には参内して勅許権僧正となり、願成寺を後陽成天皇の勅願所とする。同二十年に十島蓮華院に隠居し、元和二年に入寂した。

## 五三　願成寺勢辰袈裟

文禄二年七月十五日

願成寺所蔵

朝鮮出兵中の陣中で、戦死者の供養のため、長毎が陣中で勢辰に寄進した袈裟である。

## 五四　井伊直政書状（影写本）

（慶長五年）九月十六日

人吉市教育委員会所蔵

慶長五年、石田三成の誘いで長毎は伏見城攻撃に加わった。伏見城攻撃の報告を聞いた徳川家康は、上杉景勝平定の陣から引き返し、九月十五日の天下分け目の関が原決戦となる。

長毎は九月初めに三成の妹婿の福原直高や豊臣旧臣の垣見家純・熊谷直盛や、九州大名の秋月種長・高橋元種らとともに大垣城の守備にあたっていたが、相良家重臣の相良清兵衛は家康側と通じ

ていた。この文書は、井伊直政から長毎に、家康に肩入れ（寝返り）したいことは以前から聞いているので、高橋元種らと早く大垣城を開城するように督促した文書である。

この書状の翌日、相良清兵衛は謀略により垣見家純・熊谷直盛ら五人の武将を斬り、城将の福原直高を降伏させて開城させた。

## 五五　相良頼兄覚書状（影写本）

（慶長六年カ）六月三日

人吉市教育委員会所蔵

関が原合戦についての相良清兵衛の覚の書状で、九月十七日垣見らを討ち、同二十日に首を大津に送り、大柿城を二十三日に引渡し、二十八日に長毎は大坂で家康と会見したことを記す。

## 五六　慶長肥後国絵図写（写真パネル）

慶長十年

財団法人永青文庫所蔵

慶長十年徳川家康の命で国ごとに絵図と郷帳が作成された。肥後国絵図は相良氏から球磨郡、寺沢氏から天草郡の資料を提出させて加藤清正が全域を完成させた。本絵図はその写しで、細川氏が幕府巡検使の見回り時に使用している。

一里四寸の縮尺で作製されており、村名や村高のほか、慶長十年まで存続した諸城を記号的な描写で記入している。球磨郡では石高をもつ四十二の村があり、人吉城・大畑城・湯前城などが見える。

## 五七　徳川家光領地宛行状（影写本）

寛永十一年月日

人吉市教育委員会所蔵

徳川幕府は諸大名に領地宛行状を朱印状として給与している。この宛行状は三代将軍家光が二十代長毎に出したものである。相良家の朱印高は二万二千余とされ、これが表高として幕府の軍役の基準になった。これらの宛行状には別に領内の村名を記入した領地目録が付けられた。

## 五八　相良頼寛肖像画（写真パネル）

江戸時代

相良神社所蔵

頼寛は長毎の長子で、幼名長寿丸、後に頼尚、頼寛と名乗る。元和四年に相良清兵衛の娘亀鶴と婚姻、寛永十三年家督相続する。

寛永十七年、外戚となり藩政を私物化・牛耳っていた清兵衛を幕府に訴え、人吉城内での「お下の乱」で清兵衛一族を一掃して領主権力を一本化し藩政の安定化に努めた。

肖像は直衣束帯の朝服で冠を戴き、右手に笏を持ち、太刀を佩く。定型化した様式の姿である。

## 五九　岡本城下絵図

寛永十七年八月

熊本県立図書館所蔵

頼寛は清兵衛の悪事を列記した九ヶ条の目安を幕府に提出し、訴訟を起こした。その冒頭で、清兵衛が隠居先である岡本に人吉城下から町人を取り立てたため人吉の城下が衰微したことなどをあげている。

清兵衛の隠居屋敷の裏手には中世期の岡本城という城跡があり、清兵衛はここに松を植えるなど手を入れており、相良氏と別に城下を造る意図があったようである。

「お下の乱」後、人吉に下った幕府の上使は、岡本の清兵衛屋敷を検分し、相良家は岡本の惣絵図を進上した。この絵図はその絵図の控えとみられる。

岡本城の北麓の清兵衛屋敷を中心に家臣屋敷、庄屋屋敷、町家や米蔵が立ち並んでいた様子が知られる。

## 六〇　岡本城縄張図

岡本城は、建武五年の「相良定頼申状案」を初見に、南北朝期から戦国時代末まで使用された代表的な山城である。城地は断層崖末端の標高二七八㍍の山丘にあり、比高七〇㍍である。頂上部の主郭から派生する尾根を堀切で切断し、尾根上の斜面は階段状に腰曲輪を連続させて城郭化している。堀切は尾根上面を切断した単純な二重堀切と、その後の改修による竪堀化した大きな堀切の二種が見られる。清兵衛が築いた城下の跡には、現在でも絵図に見える地割がよく残っている。

## 六一　お下の乱絵図

寛永十七年八月

熊本県立図書館所蔵

相良清兵衛は、幕府の呼び出しにより寛永十七年六月二十日、江戸に出発した。呼び出しが清兵衛の裁判のためと知った養子の犬童（田代）半兵衛頼昌ら一族は、七月七日、清兵衛屋敷に立て篭もり、藩主方の攻撃を受けたため屋敷に火をかけ、これと切りあいとなり全滅した。

この絵図は、乱後に検分にきた幕府上使に進上された絵図の控えである。清兵衛屋敷はその権力を象徴するように球磨川沿いに広大な敷地をもち、西側が清兵衛屋敷、東側を嫡子犬童内蔵助屋敷とし、これらは中庭でつながっていた。図中の雲状の朱色は火災を表し、朱丸は切り合いの場所などを示す。

## 六二　清兵衛屋敷地下室（写真パネル）

平成九・十年度、清兵衛屋敷の一部を発掘調査した結果、お下の乱絵図に見える二階建て持仏堂の付近で石造りの地下室が発見された。最大長さ南北五、二メートル、東西六メートルの平面で、床面までの深さ三、二メートルで、二箇所に階段が付いていた。床面にはさらに深さ二、三メートルの石組みの井戸があり、その底には刀が一振、沈められていた。

出土した刀は、水に漬かっていたため刀身や鍔のほか、鞘や柄などの拵も残っていた。拵の全長一〇二〇ミリ、柄には鮫皮が巻かれ目抜金具が付く。鞘は潤色の漆塗りである。刀身は銘文がなく、刃長七六五ミリ、反り一六ミリで茎長さ二五〇ミリである。こうした地下室遺構の類例は全国的にもなく、その性格を特定しにくいが、持仏堂といった宗教施設と関わりが深いことが予想される。

## 六三　清兵衛屋敷の出土遺物

人吉市教育委員会所蔵

清兵衛屋敷の発掘調査は、その一部を確認しているのみであるが、城内の他の調査地点と比較すると、出土する陶磁器に中国・朝鮮からの輸入品が多く見られる。こうした高級陶磁器の出土は、権力と財力を持つことになった清兵衛の一面を示すものといえる。

## 六四　青井神社神輿寄進銘文板

寛永十八年九月九日　青井阿蘇神社所蔵

相良頼寛は「お下の乱」後、領民の動揺を鎮めるため、郡内諸社に参拝祈願を行い、寛永十六年師走までの郡内住民の借金を赦免し、私用の借金も利息を赦免するなどの措置を行なった。

青井神社は、古くから相良家・球磨郡の鎮護の神社で、頼寛は清兵衛事件落着後、豊永七右衛門尉長澄に命じて神輿や獅子面その他神幸行列に必要な道具を寄進している。

本資料はその寄進札で、板四枚に分けて書かれている。札には清兵衛事件の経緯を述べ、これに勝利したのは氏神である青井大明神の加護であるとして退転（損傷）していた神輿が寄進により造立（新調）され、恒例の祭礼（おくんち祭り）の鎮幸（神幸）行列も新しいものになったとの内容を記す。他の史料によれば、この時の神輿は京都において製作されたものである。

## 六五　獅子頭　一対

寛永十八年九月日

青井阿蘇神社所蔵

神輿と同様に頼寛により寄進された獅子舞の青・朱獅子の頭である。

青獅子の内面の墨書に、相良家家臣の築地主水左衛門尉秀治の製作と記す。

## 六六　相良頼喬肖像画

江戸時代中期

相良神社所蔵

頼寛の嫡子長武は寛文四年に家督し二十二代となり、頼房、頼隆、頼喬と名乗った。

頼喬の代には灌漑用水路の百太郎溝や幸野溝などの整備や開削があり、経ノ峯から免田五本松までの新道作り、球磨川水運の開設などの水利・土木事業が盛んに行なわれ、人吉藩の経済的基盤が出来上がった時期である。参勤交代も八代まで川下りを利用するようになり、田町が新しく町屋となり、寺社奉行所も新設されている。

本肖像画は直衣束帯の朝服で冠を戴き、右手に笏を持ち、太刀を佩く。定型化した様式の姿である。

## 六七　相良家譜序

延宝四年（一六七六）

人吉市教育委員会所蔵

家譜は一家の系譜を文章体で、その始祖に始まる歴代の続柄・経歴・事績などを書き上げたものである。

頼喬は家譜を編纂させることで、地方大名である相良家の由緒の正しさと家格を内外に示した。この序文は、当時の幕府の儒学者である林鵞峯（林羅山の三男）に頼喬が依頼したものである。

## 六八　藤氏相良家譜写

安永元年頃

豊永左近氏所蔵

頼喬以降、歴代の藩主は家譜を書き継いでいく。この写本は三十一代の長寛の治世中である安永元年までの当主毎の事項が記入されている。

## 六九　人吉城大絵図

江戸時代、宝暦・明和年間頃
人吉市教育委員会保管

人吉城の絵図で最も古いものは、寛永十七年の清兵衛事件に関係して作製された絵図である。描写は簡単で、曲輪の名称も一定していない。正保元年（一六四四）の徳川家光の命により球磨郡絵図とともに正保二年に作製されたはずの城絵図は現存していない。

正保城絵図は、諸藩の城郭を幕府が把握するための基本図としてあつかわれており、元禄五年を初出とする人吉城修理願いの多数の絵図と類似したものであったと推定される。

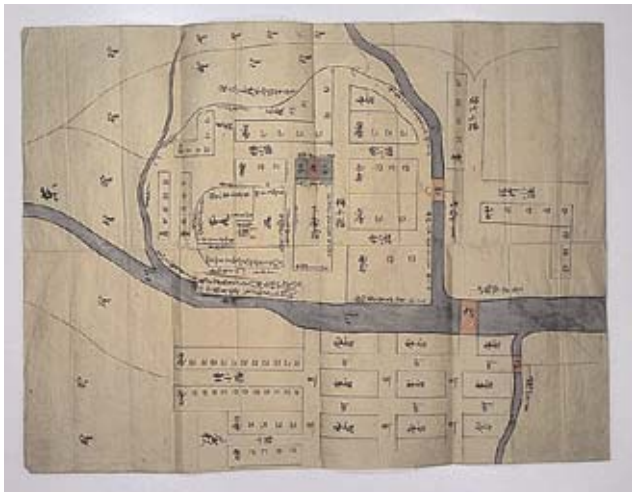
人吉藩では延宝二年（一六七四）と元禄五年（一六九二）に、一間六分＝百分の一と一間二分＝三百分の一の城絵図を作成しているが、実測記録のみが残る。

本絵図は一間を二分とした三百分の一の縮尺の大絵図で、前記の絵図類に比較して測量技術の高さが窺われる。本丸・二の丸・三の丸・外曲輪、東側の原城の家臣屋敷までを描き、建物は櫓や門・塀などの城郭建物のみが描かれ、御殿や諸役所、家臣屋敷は名称だけが書き込まれている。この絵図の作成年代は、家臣名により宝暦・明和年間頃と推定されている。

## 七〇　人吉城下絵図

寛永十七年カ
熊本県立図書館所蔵

本絵図は「相良清兵衛屋敷其他絵図面」として、お下の乱関係絵図と一緒に納められている。水の手門の部分に付箋があり東方四十五間の石垣がまだ出来上がっていないことを記す。後の原城御門はなく、代わりに原城東崖下の浪床川近くに東門を置いており、初期の人吉城の範囲を知ることができる。また、人吉城下を描いた数少ない史料の一つである。



## 七一　肥後国求麻人吉城絵図

元禄五年　　熊本県立図書館所蔵

元和元年に幕府が定めた「武家諸法度」により城郭修理は幕府の許可制となり、諸藩は修理願いの文書とともに城絵図を提出するようになった。

人吉城は寛永二年以来風水害や地震による破損の度に届出を行なっており、多くの絵図が残されている。

この絵図もその一つで、元禄五年七月二十三日付けで届け出た石垣修理願いの添付絵図の下絵図である。届出の絵図は正保城絵図と異ならないよう注意が必要で、本絵図は土手馬場や原城部分が修正されている。このときの絵図は他に慶応大学図書館所蔵の「相良家文書」や県外の個人所蔵品にもあり、届出の清絵図・御控絵図のほかに下絵図や藩の控絵図など複数の絵図が作成されたことが知られる。

## 七二　肥後国求麻城破損窺絵図

宝暦八年　　山田専二氏寄託

宝暦八年の水害により崩れた胸川沿い石垣の修理願いの添付絵図控えである。

## 七三　人吉城模型

人吉市教育委員会作製

## 七四　人吉城櫓・門古写真

明治初期　　神瀬健吾氏所蔵
人吉市教育委員会所蔵

大手門・岩下門・多門櫓・角櫓の古写真が現在残っている。これらの写真は、多門櫓が解体・払い下げされる明治五年までに藩医であった佐竹文敬により撮影されたものである。

**大手門古写真**　大手門を胸川対岸の広小路から撮影している。内枡形の石垣を土台に渡櫓をのせ、その床下を門とする。櫓は梁間二間半、桁行十二間の建物で、切妻の瓦屋根、外壁は上部が漆喰塗り仕上げの大壁で二箇所に窓が付き、下部は下見板張りとなっている。門の前面は枡形空間であるが、石畳はなく駒止めの柵を設け、門の延長からずらして木造の大手橋が架けられている。橋詰の北側には川に下る階段も見える。

別名「胸川御門」の人吉城大手門は、史料では正保年間の築造で、享保五年に「作り替え」されている。本来、櫓門は入母屋造りが原則であり、享保五年に切妻造りに変更したものとみられる。

**岩下門古写真**　岩下門は人吉城の南側入口となった門であるが、明治以後の改変が著しく現在最も旧状を残していない場所である。この古写真は不明瞭ではあるが、岩下門周辺の様子を知ることのできる貴重な史料である。

写真は胸川の河原に立ち撮影したと推定され、胸川に面する冠木門形式の岩下門が見える。門の北側の塀は大手門から続くナマコ壁の土塀で、南側の石塁に立つ塀は腕木が見えるので板塀と推定される。

江戸中期の人吉城大絵図では薬医門形式の瓦葺の門であるが、文久二年の「寅助火事」で焼失しており、簡略化し再建されたものであろう。

き出た石落としの施設や大手橋の構造も判る史料である。

多門櫓の創建は明確でないが、他の櫓と同様に寛永年間末から正保年間に完成しているとみられる。宝永四年の地震で傾いたため修理された記録がある。また、当初の長塀は板塀であったが、「寅助火事」後に厚さ三尺のナマコ壁の土塀に作り替えられている。

**多門櫓古写真**　大手門の北側石塁に建つ多門櫓を胸川左岸から撮影している。多門櫓は石塁の形状に合わせた鍵型の平面で、梁間二間、桁行二十五間の櫓である。写真では入母屋の瓦屋根の平屋建物で、外壁は上部が漆喰塗り仕上げの大壁で一間ごとに突き上げ窓が付き、下部は下見板張りとなっている。

櫓の北側にはナマコ壁の土塀が続き、川側に突き出た石落としの施設や大手橋の構造も判る史料である。

多門櫓の創建は明確でないが、他の櫓と同様に寛永年間末から正保年間に完成しているとみられる。宝永四年の地震で傾いたため修理された記録がある。また、当初の長塀は板塀であったが、「寅助火事」後に厚さ三尺のナマコ壁の土塀に作り替えられている。

**角櫓**　胸川が球磨川に合流する城地の北西角に建てられた櫓である。発掘調査により「お下の乱」後に梁間三間半、桁行十一間の櫓として建てられたことが判明している。

写真では多門櫓と同様の入母屋造りの平櫓である。外側に窓を付けるが、原版にはペン書きで修正されている。長塀は石垣に合わせて延々と東に伸びており、ムクの巨木群や外濠とした球磨川が満々と水を湛えている様子が知られる。

## 七五　人吉城下鳥瞰イメージ図

人吉市教育委員会作製

## 七六　球磨絵図写

原本、安永二年（書写、昭和初期）

西　重美氏所蔵

原本は昭和二十七年に人吉市教育会館で開催された古美術展の際に紛失している。昭和初期に写本二幅が作製されており、本絵図は、その内の一幅で、描写法から極めて忠実に描写されたものであることが判る。

この絵図は球磨川を中央に描き、人吉藩内の地誌を詳細に記したもので、立山・立川（藩用のために領民の立ち入りを禁止した山と川）や寺社の由来などを書き込んでおり、当時の藩政を知ることのできる貴重な史料である。